



異世界に存在する大陸、ミュールゲニア。

科学文明の魔手ましゅはまだこの地を覆うことなく、廢れつつあるといえ、いにしえより伝わる魔法も細々と受け継がれている。

そんな、剣と魔法が支配する世界——

シェラザード山脈の戦い——サンクワールやレイファンら同盟軍とザーマインの直接対決は、同盟軍側の勝利で幕を下ろす。

しかし、レイグル王を討ち取ることができず、ザーマイン軍も未だレイファン国境付近におり、その勝利は限りなく痛み分けに近いものだった。

一方、少年レインと宗主クレアは、人々に自らの組織の存在を広く知らしめるため、自分達の国を手に入れようと画策する。

そこで目をつけたのは、暴君バルダーが圧政を敷くバルザルグだった。

暗殺じゅうさや襲撃しゆうげきを警戒し、多数の兵士と結界で守られたマイエンブルク城に引き籠もっているバルダー王。

彼を倒すべく、少年レイン達は王城へ奇襲を仕掛ける——



※度量衡どりょうこうはあえてそのままにしてあります。



《登場人物紹介》

レイン：25歳だが、肉体年齢は18歳で永遠に停止

本編の主人公で小国サンクワールの上将軍。本人曰く、「傲岸不遜と常勝不敗が売りの、世界最強の男」。しかし、時に隠れた優しさを見せるのも。

シェルファ・アイラス・サンクワール：16歳

サンクワールの新国王。形式的には主従関係にあるが、そんなことは関係なくレインが大好き。最近、急に人格が変貌する時がある。

ラルファス・ジュリアード・サンクワール：25歳

本姓はジェルヴェール。レインの同僚で、サンクワール建国の祖である五家の一角。

ギュンター・ヴァロア：年齢不詳……外見は20歳そこそ

常に苦い表情を崩さない、レインの股肱の臣。寡黙で有能な男。主に諫諏や工作担当。

ガサラム：55歳

かつて名のある騎士だった。レインの少年時代に遭遇したきっかけで、彼の旗下に。

シルヴィア・ローゼンバーグ：3700歳以上

ヴァンパイア・マスター。元始のヴァンパイアにして、ルーンマスターの始祖でもある。

ノエル：12歳前後

超強気な魔人少女。魔族の中では若いが、上位魔人として魔界でも一目置かれている。

アリサ：外見からすると20代

魔劍サクリファイスを持つ女戦士。怜悧な美貌を持ち、魔族を憎んでいる。

クレア：16歳

謎の組織を束ねる盲目の少女。人々に仇なす魔人を一掃しようとしている。

タルマ：17歳

クレアの姉。妹と組織の行く末を憂えていた。

レイン(少年)：15歳

クレアの能力メモリーズによって出現した少年時代のレイン。

バジル：48歳

クレアに心酔する大男。ビーストマスターの能力を持つ。

レスター：22歳

クレアの配下。複数召喚得意とする、召喚士。

バルダー：中年

バルザルグの王。マイエンブルク城から圧政を敷き、国民を苦しめている。

ノース：年齢不詳 (ただし見た目は少年)

過酷な魔族の世界を嫌い、自分の殻に閉じ籠もることを望んだ魔人。

ゲネシス：見かけは20歳過ぎくらい

セレステアに降り立った魔人。好戦的な性格で、対の槍マーシレスレッドを操る。

アクター：1000年以上生きているはずだが、繊細な少年に見える

かつてゲネシスと共にミュールゲニアに侵攻した魔人。ただし戦いを好んでいない。

レイグル王：年齢等は不詳

大国ザーマインを統べる王。5年前、前王を倒して玉座に就いた。恐るべき力の持ち主。

目次

プロローグ 見切り	7
第一章 生死を預ける	19
第二章 空を飛ぶ	58
第三章 我は平穏を望む	92
第四章 魔を崇める者達	139
第五章 鏡の都市	184
第六章 人の形をしたもの	226
エピローグ 光の当たる場所	276
あとがき	284

プロローグ 見切り

プロローグ 見切り

クレア達の一行は、無事にバルザルグの王都、ファンティーヌに到着した。

もはや魔族を滅ぼす組織としては新たな転換をしつつある彼女達だが、しかし今のところはまだ隠れ潜む生活から抜け出せてはいない。

この点、組織の宗主であるクレアと——そして少年の姿をしたレインとは、意見が一致している。組織が公然と世間に名乗りを上げるのは、王都の北側にそびえ立つマイエンブルク城を落とし、バルダー王を倒してからでもいいだろうと。

そのようなわけで、今回も王都内にいる組織の援助者の元にやっかいになることとなつた。

この国では有力な商人と呼んでいい男の屋敷に、クレア他幹部数名が潜り込んだわけだが……しかし、サンクワールで世話になつた豪商の広い邸宅とは違い、ここはまた随分とこぢんまりした屋敷だつた。
木造の三階建てではあるが、既に老朽化した古い建物で、申し訳程度についた庭も、十歩も歩けば、すぐに柵に行き着く。

中も庭と同様に慎ましく、一番広い部屋が一階の居間に当たる大部屋だったが、そこで六人も入れば窮屈に感じるだろう。

長所と言えば、あまり目立たない王都の隅っこに屋敷がある、というくらいだろうか。

例えばサンクワールでは、一部の富裕な住民のお陰で国 자체が豊かな印象があるが、あいにくこの国においては、事情が違うようだつた。

裕福なはずの商人といえども、他国よりは恵まれない生活を強いられているらしい。

「クレア様をお迎えするのは望外の喜びですが、このようなあばら屋にて、汗顔の至りです」

屋敷の主人である瘦身の中年が、一階のホールまでクレア達を迎えて、深々と一礼した。彼の名はヴァレンといい、マイエンブルク城に食材その他生活雑貨を運ぶ役を一手に引き受ける、いわば城の御用商人である。

しかしその彼ですら、屋敷を新築するほどの蓄えも持たないらしい。加えて、彼が王都内に持つ店は別として、この私邸には召使いの類も皆無のようで、ある意味では徹底していた。

この国では、王とその周囲の僅かな太鼓持ち以外は、全員が等しく、豊かさとは縁がないらしい。「気にしないでください、ヴァレンさん」

「どんでもりませぬ」

クレアは焦点を結ばない瞳を彼に向け、柔らかく告げた。

「食事ができて雨に濡れないだけで、ありがたいことですよ。急な連絡にもかかわらず、私達を迎えてくれてくださり、嬉しく思います」

「どんでもりませぬ」

古着に近い灰色のスーツを着たヴァレンは、またしても頭を下げた。

「先程も申し上げた通り、お役に立てるならこれほど嬉しいことはありません。私とて、組織の一員であり、使命を忘れたことは一度もありません。滞在中、なんなりとお申し付けください。ところで――」

服と同じ灰色の髪をした彼は、クレアとタルマの後ろに立つ黒衣の少年を見て、やつと尋ねた。『どうも、最初から随分と気になつていたらしい。』

「えへ、彼は新しく雇った傭兵でしようか？」

「雇つたというか、同志ですよ」

クレアはくすりと笑い、一瞬だけレインを振り返つた。

「新たに我が組織に迎え入れた軍師兼、私の護衛兼、組織の幹部ですね。名をレインさんといいます。どうぞよしなに」

「は……それは」

予想以上に豪勢な紹介に驚いたのか、ヴァレンが目を白黒させる。

そのうち、レイン自身がぶつきらぼうに述べた。

「今の紹介は、全部忘れていい」

むすつとした顔で、あっさりとクレアの言葉を全否定する。

「俺の立場はただの護衛が一番近いと思う。それと、俺はどこでも眠れるから、部屋も適当でいいし、食事も余り物でいい。あまり気を遣わないと助かる」

「は……はあ」

どう反応したものか苦慮した様子で、ヴァレンはやせ細った少年であるレインを見やり、それから微笑したままのクレアに目を向け、最後に肩をすくめたタルマを見た。

結局、クレアがまた静かに付け足した。

「私の言葉が真実ですよ。後から他の仲間も来るので、どうぞよろしく、ヴァレンさん」

「はつ」

慌てた様子で応えたヴァレンは、息を吸い込んでクレアを見ると、思い切ったようにまた切り出した。

「それで……今回のご滞在は、どのような理由で」

「マイエンブルク城を落とし、バルダー王を倒すんだってさ」

いい加減立つていてるのが辛くなつてきたタルマが、いきなり横から口を出す。

文字通り、まん丸に目を見開いたヴァレンを見やり、人の悪い笑みを広げた。

「それもねえなんとこのレイン小僧が一人でやるらしいわよ？ 正直、世の中をナメてると思わない、こいつ？」

「きつかけを作るのは一人だが、後は手助けもいる。そう説明したはずだぞ」

レインが年齢に似合わぬ凄みのある睨みをくれたが、タルマは平然と胸を反らした。

「似たようなもんよ。とにかく、最初は一人なんでしょうが！」

「は……あの……いや、しかし——」

絶句したヴァレンは、かなり後退した額に震える手で触れ、おどおどと皆を見比べた。

「それはその、冗談ですよね？」

「なぜそう思うんだ？ たかが城一つじゃないか」

大注目を集めたレインが、無表情に言つてのけた。



……無愛想さはともかくとして、タルマが見る限り、レインのやることはいちいち謎めいて見えた。例えばファンティーヌに着いた数日後、クレアがちらほらと集まりつつある組織のメンバーに対し、剣技を指導していたことがあった。

事情があつてバジルはまだ到着していないが、先に来ていた召喚士のレスターが、神官が纏うような白いローブ姿のまま、クレアと練習試合をやつたのだ。

クレアの腕はなにしろ組織内では一番（のはず）なので、時折こうして仲間に稽古をつけてやっている。レスターは剣技の方は専門ではないので、なおのこと、たまには稽古も必要となる。

いざ戦闘ともなれば、剣を使わざるを得ない時も考えられるからだ。

今回、クレアは地下の倉庫部屋を借り、木箱や樽などを周囲にどけて剣技指導を行つていた。もちろん、相手はレスターだけではなく、タルマ本人も含めて、組織のメンバーが数名ほどいた。そこへ、珍しくレインがぶらりと顔を見せ、部屋の隅に置かれた木箱に座つたので、皆は大いに驚いた。

「……いやあ、あんたに稽古は必要ないんじゃないかなあ？」

日頃、意外とレインと上手くやつているレスターが、目を丸くして尋ねたほどだ。

余談だが、レインは絶望的に無愛想な割に、なぜか（一部を除いて）組織のメンバーの信頼が厚く、今や昔から組織にいたかのように溶け込んでしまつている。

こいつはむすつとして一言もしやべらないことが多いくせに、姿が見えなくなると、どういうわけか妙に気にする者が多い。

それはもう、誰かが必ず「レインが見当たらないけど、どうしたかな?」などと、心配そうに周囲を見渡すのである。

『レイン小僧の七不思議』とタルマがこつそり命名しているほどで、これまで密かに数えていたところでは、レインの姿が見えない時に、それを指摘しなかつた者がいなかつた試しはない。たまにクレア達が一階の居間になんとなく集まつて話し合うことがあるが——仮に最初はレインが部屋にいて、途中からひつそりと姿を消しても、必ず誰かが気付いて口にするのだ。これはもう、不思議と言う他はない。

無駄に存在感が大きいようで、タルマとしては首を傾げざるを得ない。

とはいって、愛想のなさは全く変わらない。やつてきた彼は、今もあつさりこう言つた。

「稽古のいろいろヤツなんかいはずだ。ちょっと見学させてもらおうと思つたんだ」「そうかあ。でもまあ、僕の剣技は無視して、クレア様のだけ見ててくれよ?」

「俺の見たところ、おまえも筋は悪くないと思う」

どこまで本気なのか、レインがぼそつと返すと、レスターは丸い顔に満面の笑みを広げ、物もの凄く嬉しそうに笑った。

「よ、よせやい……へへへつ」

実におめでたいヤツである。

……と皮肉な目でタルマは見ていたが、案外、レインは本気でそう言つたのかもしれない。結局、彼女にもレインの本心はイマイチわからないのだつた。

ともあれ、レスターの稽古が終わり、彼がくたくたになつて引き上げた後も、クレアは疲れた素振りも見せずに残つた全員の相手をしていた。

どうどう最後の一人であるタルマの番になつても、なぜかレインはまだ同じ木箱に座り、じつと稽古を眺めていた。

「あんたさ！ そこで瞬きもせざむ見つめられると……（息切れ）……気になるんだけどっ」

宗主とはいへ、妹から木剣で首筋に寸止めされ、数度目の敗北が確定した時、タルマはついにレイン小僧を睨み付けた。

もちろん、堂々たる八つ当たりである。

「そうか、悪かった。……おそらく二度と邪魔することはないから、今回は許してくれ」あつさりそう言つて立ち上がつたレインに、なぜか慌てたのはクレアである。

「一度と来ない、というほどのことでもないでしょう？ なにか、私に気に入らないところでもありますか？」

「いや」

早くも立ち上がりついたレインは、すぐに首を振つた。

「そうじゃなく——」

しばらく迷つている様子だつたが、ためらいがちに述べた。

「もう十分に見せてもらつたと思ったんだ」

タルマとクレアは、姉妹揃つて顔を見合させた。

「なにさ、それ？ もしかして、見るべきは全部見たつてこと？」

「……私から学ぶようなことは、もうなさそだということですか？」

これまた、姉妹揃つて不機嫌な口調で尋ねる。

さすがのクレアも、やや**憮然**としていた。

「俺にとつては、これも修練の一つだつたんだ。そう気にしないでくれ」意外なことに、レインは決まりが悪そうだった。

嘘をつきたくないで正直に述べたものの、後の展開に困惑した……そういう様子だった。とはいえる、今更遅い。

「よおし、そこまで言うなら、クレアと一発やつちやいなよ！」

タルマは大声でけしかけ、直後に慌てて手を振った。

「あつ。し、試合のことだからね、試合のつ」

「……何を焦つてるんだ、おまえは。言われなくともわかってる」

涙面でレインは返し、そのまま背を向けた。

「もうみんな疲れてるだろうし、必要もないはずだ」

「まあ、そう言わずに。私も興味があります、レインさん」

クレアはさつと退去しようとするレインの前へ回り込み、真剣な顔で彼を見た。

裾の短いチュニック姿だったが、既に手にはもう一振りの木剣を持っていて、それを素早くレインに押しつけてしまう。

「一度、お願ひできませんか？ 貴方の現時点での実力には、私も興味がありますし」

「おお、クレアも意趣返しすることがあるのねえ」

タルマはニヤニヤと笑い、自分が代わりに木箱に座り込む。

「さつ、思う存分、叩きのめしちゃって！ こいつに寸止めとか、全くいらないし」

「いえ……あくまで練習ですよ、これは」

もはやすっかり不機嫌な表情は消え、今度はクレアの方が困惑していた。

「ただ、試してみたいだけです」

「……いいだろう。ちょうど今は、余計な見物人もいないしな」

迷つていたレインは、結局は思い直したのか、木剣を下段に構えた。

「俺はいつでもいい。殺す気で来てくれ」
至極**真面目**な顔で、とんでもないことを言う。

さすがのタルマも顔をしかめたが、すぐに申し出た。

「よおーし、その言葉を忘れないでよ？ あたしが、臨時の審判役をしてあげようじゃないさ」

タルマはわざわざ両者の中間に立つと、片手を上げて二人を交互に見た。

「手を下ろしたら『はじめ』の合図つてことでいい？」

「いいです」

「別になんだつていい」

一人の承諾を得た瞬間、タルマは自分が人の悪い笑みを浮かべているのが実感できた。

これでさすがのレインも、少しは己の分を知ることだろう。だいたいこのレインこぞう小僧は、ちょっと強いからといって、日頃から生意氣である。

クレアに対しては「あんた」と呼ぶのに、自分に対しては「おまえ」と呼ぶのも、大いに気に食わない。

みみつちい私怨しづんを胸に秘め、タルマは思いっきり手を振り下ろした。

「それでは——はじめっ」

第一章 生死を預ける

あの地下倉庫での練習試合中、見物人が自分で幸いだったと、タルマは後になつてから思った。いや、そもそも試合直後は「こいつ絶対イカサマしてるでしょ!?」とタルマは思つたのだが……何度やろうと同じ結果になるのを見て、認める他はなくなつた。

……どうやらレインは、しばらくクレアの剣技を見物して、すっかり見切つてしまつたらしい。はじめっ——とタルマが叫んだ次の瞬間、クレアは風のようにレインの間合いに躍り込んだのだが、彼の身体が残像を残して綺麗きれいに流れたかと思うと、ぴたりと木剣がクレアの首筋で止められていたのだ。

一部始終を見ていたタルマでさえ、正直、何が起つたのかよくわからなかつた。

「ええつ」「まさか！」

タルマは当事者のクレアと共に、姉妹して叫んでしまう。どうにも納得できなかつた。

今現在はれつきとした成人であり、上将軍として活躍もしているサンクワールのレインとだつて、クレアはかなりよい勝負をしたと聞く。それがどうして、まだ十五歳やそこらの、ガキンちよレンに敗れるのか？

こんな理不尽な話はない。

「あんたなに、手を抜いたわけ？」

タルマが思わず妹に尋ねたのも、当然だろう。

しかし、クレアの顔色を見れば、彼女自身にも意外なことだったとはつきりわかつた。

「も、もう一度お願ひできますか？」どうも納得がいきません」

「構わないが……今ままだと、何度繰り返しても同じだぞ」

レイン小僧こぞうが生意気なセリフを吐いたが、実際、彼の言う通りだつた。

もう一度、両者が中央に戻り、木剣を構え直して相対し、タルマが合図を出す——今度もまた、先の試合と同じ結果になつた。

というより、タルマの目には、前回より勝負が決まるのが早かつたように思えた。

クレアの繰り出す必殺の斬撃ざんげきは空しく残像を斬り、そして次の瞬間、死角から剣撃を放つたレンがクレアの急所で寸止めをする。

まるで、お互いに入念に打ち合わせたかのような動きで、開始合図と同時に双方が流れるようにな



動き、気付ければレインの木剣がクレアの首筋にぴたりと当てられていた。

……本当に、呆れるほど瞬時に勝負がついた。

こいつら、わざとやつてるとタルマが疑つたほどだ。

「……どうして」

ここ何年も見たことがないほど混乱した表情で、クレアがレインを見た。レインは実に居心地悪く觀察すればするほど、相手の動きが読めてしまう

「あんたの調子が悪いんじゃない。前に言わなかつたか？」俺にはそういうことが可能なんだ。長

く観察すればするほど、相手の動きが読めてしまう

淡々と説明しつつ、例によつてこいつは余計な解説もしてくれた。

いや、本人にしてみれば、クレアが受けたショックを本気で案じてのことかもしれないが。

「俺が無用の試合を受けたのは、実地で見た方が納得しやすいと思つたからだ。以前忠告しただろ？例のあいつとは絶対に戦うなど。多分、あんたは前回の戦いの時にも死の淵にいたと思うし、次は確実に殺される。これでわかつてくれたと思うんだが」

困つたような顔でクレアを見るレインである。

クレアのショックが大きいようなので、心配しているらしい。

「そう……ですね」

当のクレアは、やがて大きく息を吐き、苦笑めいたものを浮かべた。

「信じる他はありますまい。貴方のあだ名は伊達ではないようですね。こう見えて、私も天才剣士扱いされてたんですけど、自信が消滅する思いです」

「じゃあ、無闇にあいつに手を出すのはやめてくれるな？」

「ていうかさあ、今のはイカサマじゃないの一？」

タルマはしんなりとした目でレインを見やり、疑惑を表明したが……双方から無視された。

「ご心配をどうも。でも、今の組織は無差別に魔族を狩ることを目的としていません。放つておいても、もはやあの方とぶつかることはないと思いますわ」

「俺もそう思うんだが……言いたくないが、あいつは頑固だからな。状況によつては、そうとも言いい切れない」

レインが大真面目な顔で首を振り、クレアとタルマは思わず顔を見合わせて噴き出してしまった。

このレインは……あくまでも自分こそがレイン本人であり、向こうはただの別人だと思つていてもようだった。

不思議なのは、本来はむしろ逆なのだが……彼と接しているうちに、タルマ達も少しずつそんな気持ちになつてしまつてていることだろう。

間借りしたヴァレンの私邸ではそんな出来事もあったものの、レインの場合、こつそり外出している時間の方が長かつた。

しかも、妙にかさばる大荷物を背中に背負い込んで、ふらりと消えてしまう。全て彼の自由にやらせているクレアが、「何をしているのですか?」と試みに訊いたことがあるが、レインは「下調べと天候の確認だ」と述べるだけで、具体的には何も教えてくれなかつた。

というか、やはりこの王都ファンティースに着いてからも、今までと同様、レインは外出する度に生傷をこしらえて戻つて来るのでいたらくで、クレアはもちろん、タルマもだんだん本気で心配になつてきた。

無論、この場合のタルマの心配とは、レインが性急な動きをすることで、組織まで危険に晒されることを指している……つもりだ。

「あんたさ、いい加減、何をしているのか話しなよ」

地下の倉庫でおかしな工作などやつているレインに向かい、タルマはある日、断固として詰問した。レインは樽に腰掛け、でつかい木片を相手に格闘しているが、何を作つてのやら、さつぱりわからない。おおざつぱに言うと、こいつが削つて形を整えているのは三角形の『何か』だが、

それはあくまで『もつと大きな本体』の一部のように見える。

おまけに、黙々と工作用のナイフを動かしながら、レインは言うのである。

「話してもいいが、どうせ信じてもらえない」

「あっそう。なら、この際は逆にあたしがあんたに警告しておくけどさ」

と、タルマはわざわざ自分も木箱の上に座り込み、じつとレインを見た。

「バジルが明日、到着するつて報告が来たよ。……あんた、わかつてる?」

「それは、俺が恨まれているのがわかつていいか、という意味なのか?」

レインはやつと木片を削る手を止め、タルマを見た。

——ああ、あたしはこいつの瞳が苦手!

ばつちり視線を合わせたタルマは思う。いつも思うのだが、二人きりの時は特にそう思う。

別に、こっちの胸やら腰やらを見るといった、たまに他の男性から感じる性的な視線では全然ない。本人の日頃の言動通り、実に静かに澄み切つた、綺麗な黒い瞳なのだが。

なぜだろうか、じつと見つめていると落ち着かない気分になるのだ。

タルマは、昔から夜空を見上げた時に、微妙に恐怖を覚えることがあるが……あの時の感覚と少し似ているかもしれない。

しかも、こいつの瞳は落ち着きすぎるほど落ち着いているように見えて、なぜか本当は灼熱の感情を隠し持つているような気がしてならない。

このレインこぞう小僧は平静そうに見え、実はそんなマグマのようないいを常に抑え込んでいる……タルマはそう思えてならないのである。

「……タルマ？」

黙り込んだタルマに、レインが静かに尋ねた。

目を瞬き、タルマは息を吐く。

「ど、とにかくね、あいつはあなたのせいで、クレアの前で赤恥ぱじかいたと思ってるわけで、いきなり襲いかかってくる可能性もあるわ。いくらあなたでも、獣化したバジルとやり合って嫌でしょ？ 用心した方がいいんじゃない？」

「俺が、バジルと戦うことはない」

レインが、時折見せる不思議な自信と共にほざいた。

しかも、お得意の断定口調である。

「……なんで？ あんたなに、そこまで自分の実力に自信うぬぼれてんの？」

「違う。戦うことなどないと言つてるんだ。言い換えれば、あいつを相手に俺が剣を抜くことはない。だから心配いらぬ」

しつつと言い切るレインに、タルマはもちろん眉根まゆねを寄せた。

言つちゃ悪いが、タルマはバジルと知り合つてから五年以上が経つ。あいつは小心者だが、切れた時は誰も手がつけられない。現についてこの間も、タルマは山小屋で獣化したバジルとかち合つたばかりなのだ。

途端に、毛むくじやらのバジルの裸が脳裏に鮮明に浮かんだ。

「うわあ！ あんたのせいで、あいつのすつ裸を思い出したじやないさつ。どうしてくれんのつ」チユニックの袖をまくつて、鳥肌とりはだが立つたのをレインに見せつけ、タルマは思う存分、不平を鳴らしてやつた。だいたい前回の事件でも、バジルのレインへの嫉妬しつとん心のお陰で、思わぬ巻き添えを食らつたようなものなのだ。

それを指摘すると、しかしレインは、思いの外素直に低頭ていとうした。

「それは悪かった。だが、今回同じことがあれば、俺が直接、あいつと話すさ。だから、もう迷惑はかけない」

「迷惑つていうか……クレアも心配してるよ。あの子は事情がよくわかつてないけど、バジルがあんたを恨んでるのは、何となく察してるみたいだからさ」

タルマは両手を広げて教えてやつた。

本当はクレアにも、「バジルがあんたをレインに取られると思つて、嫉妬しつとしまくりなんだよねえ」とずばつと言つてやつてもよいのだが……妹にこれ以上余計な気苦労を押しつけるのもどうかと思

い、堪えているのである。

「……第一、妹はバジルを仲間としか思つてないからねえ」
わざとらしく咳き、タルマはレインをちらつと見やる。

しかし、この時のレインは頑なに沈黙を保つた。

……結局、問題が解決しないまま翌日になり、バジルがとうとう屋敷へ來た。

バジルの来訪は、タルマから見ると最悪だつた。

なにしろ到着した時、組織の中で唯一バジルを抑えられるはずの妹のクレアが、たまたま王都フアンティースの偵察のため、屋敷を出ていたのだ。

普通、そういう時はレインもついていくのだが、今回はレイン自身がクレアより先にどこかへ偵察に出かけていて、同行できなかつたのだ。

……なのに、午後遅くなつてバジルが到着する直前、当のレインは屋敷に戻つていた。

クレアがまだ戻らないのに一人が顔を合わせたわけで、全くもつて最悪の事態だつた。

そもそもバジルは、すつ裸で山小屋のそばに倒れていたのをクレアに見られたと勘違いしている。今回、「私用のため、後から追いつきます」などと旅立ち前に別行動を取つていたが、実はそれは言い訳にすぎず、遅れたのはあの件を恥じたからではないかと、タルマは睨んでいる。

どうせ今の今まで、一人でどこかに籠もつて呻いていたに違いない。

暴れたら手がつけられないくせに、本質的に弱虫のバジルは、クレアに対しては（色々な意味で）からきし駄目なのだ。

それでも、応対に出た屋敷の主人であるヴァレンと対応している時は、まだバジルは大人しかつたのである。

なのに、余計なところへ余計なヤツ（つまりレイン）が屋敷のホールにわざわざ出てきて、その和やかな場面を凍り付かせた。

当たり前のような顔で奥から出て来て、バジルに軽く頷いて見せたのだ。

本人は挨拶のつもりらしいが……これほど空気を読まない小僧を、タルマは寡聞にして知らない。

「——あ、あんたねっ」

心配で先にホールに出ていたタルマは、無論、慌ててレインを隅の方へ引っ張つていった。

「なに考えてんのよつ。どうして出てくるかな！」

「なにがだ？」

「しつれつと、『なにがだ?』じゃないわよ! あれ見てわからない!」

呆れてしまい、タルマは戸口に立つバジルの方に目配せする。

革ズボンと麻のシャツという粗末な格好のバジルは、髪を逆立て、黒い瞳を充血させてレインを

睨んでいた。先程までは「お世話になります」などと、ヴァレンに低頭していたのに、今やそのヴァレンがたじろいで後退するような形相だった。猫背だつたたくましい上体も真っ直ぐに伸び、二メートルに近い巨躯がレインを威圧するように見下ろしている。

「わつ。いきなりこれ!?!」

遅れてホールに出迎えに出てきたレスターも、いきなり仰け反っていた。

「バ、バジル。ねえ、落ち着きなよ」

タルマに代わり、比較的バジルと仲のいい彼は、困ったように宥め始めた。

しかし、バジルは鼻息も荒く喚き返す。

「わしは落ち着いているつ」

正面ホールの窓がビリビリ震えるような怒声であり、顔が真っ赤だった。

「いや、どこが落ち着いてんだよー」

眉根を寄せたレスターは、静かに立つレインとバジルの間に割り込んだ。殊勝にも、喧嘩を止めようとしているらしい。

レスターはレインにも好意を抱いているらしいので、何とかしたいと思ったのかもしれない。

「今このレインは、敵じゃなくて仲間なんだ。以前みたいに熱くなる必要はないんだから——」

「こいつのどこが仲間だああつ」

「うへつ」

さすがのレスターも手で耳を塞ぐようになつかい声だつた。

というか、とうに耳を塞いでいたタルマですら、あまりの音量に顔をしかめた。

「あんた馬鹿なのつ。隠れて潜んでるのが、わからないかしらね！ でつかい声で喚くな、馬鹿馬鹿あつ」

「……おまえの声も、十分すぎるほどうるさい」

レインが横でぶすつと吐かす。

人がせつかくバジルを止めようとしてやつてるのに、恩を仇で返すヤツである。

「あんたね」

タルマが吐き出そうとした嫌みを無視し、レインは自ら前へ出た。

「俺に話したいことがあるんだろ?」

「な、なにつ」

荒い呼吸と共に肩を派手に上下させ、レインを睨んでいたバジルが、ようやく戸惑った表情を見

せた。

「ちゃんと聞こえたはずだ。その様子では、俺に苦情があるんだろうなと思うが……違うか？」

「そ、そうだっ」

唾^{つば}を飛ばしたバジルに対し、レインは静かに屋敷のドアを指差した。

「だと思った。それなら話を聞こう……外へ出ないか？」

「あんた、脳みそ沸いてんの!? 表へ出ろって、喧嘩^{けんか}売るようなモンじゃないさつ」

「おいおい、レインつ。そりやまずいよ！」

焦^{あせ}ったタルマとレスターが一人して止めようとしたが、レインはもうさつさと屋敷のドアを開けていた。

「二人で話すのが一番だと思う。あんたも、異論はあるまい?」

振り返ったレインが、どうということのない顔で首を傾げた。

まつたく平静であり、緊張しているような様子は露ほども見られなかつた。これが本心なら、こいつは信じ難いほど鈍感^{どんかん}か……あるいはタルマが思う以上に自信過剰の傲慢^{かじょう}なヤツだったのかもしれない。

とはいえ、留守を預かるタルマとしては、そのまま行かせるわけにもいかない。

バジル自身は拍子抜けしたように、「む……いいだろう」と覚悟を決めたように頷いて後に続こうとしていたが、とんでもない話である。

「組織内で私闘は御法度だよ！ あたしが行かせ——」

タルマは断固として止めようと足を踏み出しかけたが、その前に外に出ていたレインが、振り返つて素早く何事か詠唱^{えいしょう}するのがわかつた。途端に、外へ飛び出そうとしたタルマは、見えない障壁^{じょうへき}に弾かれておでこをぶつけた。

「いつつ」

頭を抱えて呻いてしまう。

「なによう、これつ」

その間に、レインはバジルを従えて、既に中庭から外の小道へ出て行くところだつた。どうも、あいつが魔法でタルマ達を屋敷内に閉じ込めたらしい。

「待て、くおらあーーーー！」

むかつ腹が立つたタルマは、思わず怒鳴りつけてしまう。隠れ住んでると言つたのは自分なのだが、怒りでそんな配慮は消し飛んだ。

「魔法まで使って人の親切を台無しにする氣つ」

渾身の叱声に對し、反應は乏しかつた。

振り向いてペコペコ頭を下げたのはバジルのみで、レインは先頭に立ってじんづん先へ行つてしまつた。

早くも、角を曲がつて見えなくなつてしまつた。

「どうします?」

坊ちゃん顔のレスターがおそるおそる尋ねた。

完璧な八つ当たりで、タルマは叱り飛ばしてやつた。

「もちろん、シールドをぶち破つて追いかけるに決まつてるよ! 間抜け顔で『どうします?』じやないわよつ。あんたがどうにかしなさい!!」

「は、はいいいつ」

「すみません」

レスターはおろか、呆然と立つて成り行きを眺めていた主人のヴァレンまで飛び上がつた。



黒髪を逆立てたバジルは、悠然と前を行くレインの後について歩きながら、実は微かな畏怖の念も覚えていた。

かつてサンクワールに住える、もう一人のレインと初めて相対した時、バジルは内心で激しい恐怖を感じている。あの時は、当のレインからずばりそのことを指摘されたが……似たような怯懦が今再び、バジルを襲い始めた。

そもそもこいつは、自分がどれだけ怒り狂つているかを知つてゐるはずだ。

バジルは、少年のレインと距離を置いて歩きながら考える。

なにしろ、あのレイファンの山小屋での事件の後、目覚めたバジルは仮の本拠にしていた教会へ戻るや否や、真っ先にレインを呼び出して糾弾したからだ。

レインは大人しく聞いた後、はつきりとクレア誘拐の件を否定したし、何よりもクレア本人が完全に否定した。

レインはともかく、クレア本人にそう言われてはどうにもならず、バジルもその時は渋々、怒りを収めた。その代わり、それから一行が旅立つまで、バジルは徹底してレインを避けた。今度顔を見れば、自分が爆発するとわかつていたからだ。

だがもちろん、レインはちゃんと氣付いていたはずだ。

バジルの心中に、今も変わらず殺意がくすぶり続けていることを。

いや、レインのことだから、殺意どころか嫉妬心だつて探知しているかもしれないのだ。

そう思うと、余計に怒りがたぎり出すバジルである。
しかし同時に、我が庭を行くように背筋を伸ばして先を歩くレインの背中を見ていると……忘れ

ていたはずの恐怖心がまさまさと蘇よみがえるのも確かだつた。

風でも吹けば倒れそうな木造家屋が並ぶ、王都にしては貧しい印象のファンティーヌの街中を、レインは自然な足取りでどんどん進んでいく。

引率されるようについていくバジルは、気が気ではなかつた。

こいつは一体、どこへ向かつているのだろうか？ レインにとつてもこの街は初めてのはずなのだし、万一城から派遣された警備隊にでも見つかると、非常にまずいことになるだろう。それなのに、レインの態度にはコソコソするような様子は微塵みじんもない。

堂々としすぎである。

バジルの心中で、怒りよりも心配の比重が高くなってきた頃、ようやくレインは大通りから路地の方へ曲がり、とある小さな屋敷のドアを開けて入つた……しかもノックもせずに開けたのだ。バジルが顔をしかめて立ち止まるとき、レインはドアを開けたまま振り向き、顎あごをしゃくつた。

「着いたぞ、この奥だ……邪魔が入らずに話す分にはいい」

こいつ、わしを逆に殺すつもりではないのか？

コトここに至ると、バジルもそう疑わざるを得ない。荒れ放題のこの屋敷は、どうも空き家に見えるが、それもバジルの疑いを深めた。

クレアに出会う遙はるか以前は、組織の下つ端として、皆に小突かれながら使い走りをこなしていた自分である。当時の背を丸めて生きていた頃のことが思い出され、バジルの怒りはにわかに減じた。

わしは……わしはあるいは、自分など及びもつかないような相手に喧嘩けんかを売ろうとしていたのではないか？

今でも鮮明に覚えていることだが、かつてバジルは、敵となつたサンクワールのレインのことを調べていた時、少年時代の彼に会つたという傭兵ようへいに話を聞いたことがある。そいつ自身も歴戦の戦士だつたはずだが、レインのことを語る時、彼は懐かしそうに目を細め、こう述べた。

「あの人はなあ、俺達とは全然違う人種だと思うね」

……レイン本人より随分と年上のくせに、「あの人」扱いである。

「なに!? それは、ヤツがどこか遠い国から来たという意味か？」

バジルは確か、そう訊きいたはずだ。

しかし、その傭兵ようへいは馬鹿にしたように鼻を鳴らすと、バジルが奢おごつてやつた酒のグラスを、だんつとカウンターに置いた。

「ちげーよ！ 誰も、あの人みたいにはなれない——そういう意味で言つたんだ」

じろつと、そいつはバジルに睨むのみをくれた。

バジルが言うのもなんだが、熊でもひねり殺しそうな強面じやうめんだった。

「昔、俺はまだガキだったあの人の戦い振りを見た。当時から、知られざる天才剣士と呼ばれていた、あの人の剣技を見たんだぜ？」 その時の戦い振りも凄かつたが……ちょっと一緒にいただけで、俺はもう『ああ、こりや腕だけの問題じゃねーな』と悟った

年季の入った傭兵は、ゆっくりと首を振つた。

灰色の瞳に、呆れたことにある種の憧れが窺えた。

「違うんだよ、何もかも違う……こっちとは心構えが違うし、目指すところも違う……そんなことはありえねーが、仮に俺が技量で並んだとしても、やっぱり那人と肩を並べることはできねー」

反論など許さない気迫で、相手が言い切る。

「わかるか？」 あの人はな、俺達とは根本から差があるんだって。俺はあるの天才剣士を尊敬してるが、どんなに憧れても、あはなれないこともわかつて。多少でも本人を知る者は、みんなそう思つてるさ。だからこそ、あの人は傭兵の中でも別格なんだ」

その時は馬鹿らしくなつて内心で笑つたバジルだが、今は笑えない。

振り向いたレインの瞳を直視している今は、特に。

こいつの瞳はこんなに静かなのに、見返すとどうしてこうも気圧されるのだろうか。

しかし、レインが『どうした？ 話があるんだろ？』と促したお陰で、バジルは覚悟を決めた。サンクワールにいる本物のレイン相手ならともかく、こいつは未だに子供に過ぎない。

今のはしが、何を恐れることがある？

もはや……組織に拾われたばかりの奴隸の子ではないのだ。

肩を怒らせたバジルは、レインに続いて階段を上り、二階にあつた開けた部屋に着いた。
どういう事情があるのかわからないが、そこは家具がほとんど盗まれた後らしく、椅子が二つほど転がっているだけで、後は埃に塗れている。

カーテンだけはまだ窓にかかつていて、それもビリビリに破けていた。

レインは転がつた木椅子の一つを起こすと、そこへ座り、バジルに頷いて見せた。

「ここなら邪魔も入らない。話を聞こうじゃないか」

「は、話だと!?」

バジルは自分は座らず、逆にレインから少し離れ、間合いを置いた。奇襲を警戒したからだ。
「おまえとわしの間に、話すことなどない。おまえも、とうにわしの怒りに気付いているはずだぞ！」

指を突きつけて糾弾する内に、バジルの抑圧された怒りが、また膨らんできた。

体臭がキツくなり、体毛が一斉に伸び始める。変化しかけていたが、今回ばかりは自分でも特に抑制する気はなかつた——が。

「……あんたは勘違いしてるよ」

嘘のようすに平静な声で言われ、バジルの変化は停止した。

「な、なに？」

「聞こえたはずだ。クレアは俺を気に入つてはいるかもしねない……だけど、特別な感情などないと思う。元より俺は、他人に愛されるような男じゃないからだ」

「どういう思い込みなのか、やたらと確信ありげに言われ、バジルは太い眉を寄せる。相手が本気で述べたように思えたからだ。」

「お、おまえはどうなんだ？」

あまりと言えばあまりなレインの落ち着き振りに威圧感を覚え、どもつてしまつた。

「俺？」別にクレアは嫌いじやないが、俺にはもう心に決めた人がいる」

レインは即答した。

座したまま透き通つた瞳でバジルを見上げ、息を吐く。セリフの割に、随分と苦しそうな表情だった。

「事情が事情だから、あんたには話しておこう……少し前まで、俺には愛する人がいたんだ。名を、ファーネという。優しくて綺麗な人だつた……俺には過ぎた人だつた。俺はその人に向かい、『僕の生ある限り、ファーネを愛するよ』と誓つた。彼女も、泣きながら俺を受け入れてくれたよ」

レインは右手を胸に当て、バジルをじつと見つめた。

深い湖のような瞳が哀しみに満ちていた。

「だけど、あの優しいファーネは、もういない。俺のせいで殺されてしまつたけれど、あの時の誓いだけは、今も俺の心中にある。仮にそばにいなくても、心変わりなどあり得ない。……だから、あんたの心配は杞憂なんだよ」

「ひ、人は変わるのだ」

「少なくとも、俺は変わらない」

レインはゆつくりと首を振つた。

「あんたの言う通り、俺も以前は恐れていた。こんなに好きなのに、その気持ちもいつかは薄れしていくんじゃないかと。彼女のことを忘れ、自分が彼女を見殺しにしたのも忘れ、何事もなかつたよう日に日々を送る日が来るんじやないかとな。だが、それはないとわかつた。今のヤツに遭遇し、その心配は危惧だと悟つたんだ。少なくとも俺の誓いは守られている」

「い、今のヤツ」と、サンクワールに仕える、あのレインか？」

呆然とバジルが見返すと、レインは小さく頷いた。

「そう、あいつだ。あいつとやり合つたのは、あんたも聞いてるだろう？ 俺の罵声に、あいつが笑みを引っ込めた時、その顔を見て、ようやく俺にもわかつた。ああ、十年経とうが、何も変化しないんだなど。相変わらず俺は、彼女を忘れてないと……その時にわかつた。おかしな話だけど、ほつとしたよ」

寂しそうに微笑し、レインは続ける。

「それでいい、俺はそれでいいんだ、バジル。フィーネが眼前で死んだあの瞬間、俺の心も死んだんだ、バジル。だからこそ、俺は表面的にしか笑えないし、恐怖も感じない。死が目前に迫るうと、まるで動じないだろう……人並みの感情が持てなくなつているんだ」

「そうだが、これは自分のための喪服もある。フィーネが眼前で死んだあの瞬間、俺の心も死んだんだ、バジル。だからこそ、俺は表面的にしか笑えないし、恐怖も感じない。死が目前に迫るうと、まるで動じないだろう……人並みの感情が持てなくなつているんだ」

レインの告白を聞いて、バジルの心が動かなかつたと言えば、嘘になる。
しかし、それ以上にクレアを奪われたと思う気持ちの方が強かつた。有り体に言えば、それだけ巨大な嫉妬心を抱いていたと言える。

「ならば……ならば、わしも、変身してお前の肉体を引き裂くことまではすまい。しかし、おまえへの憎しみが消えたわけではない」

バジルはそう叫ぶと、数歩下がつて長剣を抜いた。

体格にあつた長大な業物だが、見つめるレインは特に動じた様子もなかつた。

「最初、俺はあんたを誤解していた。あんたがあの山小屋まで追いかけて来た直後くらいまでは。

レインの叱声に、激しかけたバジルは思わず口を噤む。

「……何が言いたいのだ、おまえはっ」「こんなことは無駄だと言つてるんだ、バジル。あんたには俺を殺せない」「——！ そこまでわしを」「悔つて言うのではない」

レインの叱声に、激しかけたバジルは思わず口を噤む。

「どうもこいつには調子を狂わされっぱなしだつた。

「あんたは粗暴な割に弱気な男だと思ったのも、俺の勘違いだ。しばらく見ていてわかつた。弱気じゃなくて、あんたは優しすぎる男なんだ。確信を持つて言うが、誰かと戦う時に高揚感を覚えたことなどあるまい？ 時には人を殺すこともあるんだろうが、それは常にやむを得ない時だけだし、いつだってあんたは嫌々やってたはずだ」

弱虫とか弱気だとかはよくタルマに言われるが、バジルの人生において『優しい』などと言われた経験は皆無である。

唚然として見返すバジルを無視して、レインはなおも言う。

「俺は優しいヤツにはほど遠いが、少なくとも理由もなく人を殺したことはない。そして、今の俺にあなたを殺す理由なんかないんだ」

「おまえになくとも、わしはあるつ。この問答自体が無意味だつ」

「気圧されまいとバジルは大きく長剣を振りかぶり、汗まみれの顔で静かに座るレインを睨む。

「抜け、レインつ。さもなくば、このまま首を刎ねるまで！」

「それはクレアのためになるのか？ 彼女が本当に喜ぶことか？ おまえは一時の怒りと嫉妬に、
我を忘れているだけだ。言つたはずだぞ、あなたが俺を殺すことはない。俺がみえみえの挑発に応
じない限りは、な。もちろん、俺は応じないが」

背筋を伸ばして座すレインは、バジルと違つて汗一つかいていない。

少なくとも、こいつが相応の覚悟で言つてるらしいのは、確かだつた。

「では、無抵抗で死ぬがいいつ」

しゃがれ声でバジルが喰ると、レインはどうとう魔剣に手をかけた。

ある意味、バジルはほつとしたほどだが……あいにく、レインは魔剣を鞘ごとベルトから外し、足下に置いてしまつた。

「よく考えたら、今は無用だしな」

「くだらぬ真似をつ。わからないのか、おまえは死地にいるのだぞ！ わしに、無抵抗な相手を殺
させるなつ」

「あんたこそ、何度も言わせるな。俺にはあんたを斬る理由がないし、自分で言うように、あんた
も無抵抗な男を斬るヤツじやない」

不思議なほど穏やかな表情だつたし、奇妙な自信に溢れていた。

「それこそ、ガキの甘い見通しだ！」

「俺は自分の確信に自信があるが、それが誤りだとすれば、そんな甘い性根のヤツが今後も戦いに
彩られた人生を送れるとは思えないな」

他人事のように、丸腰になつたレインは肩をすくめる。

「今を生き長らえても、どうせすぐにくだらない死に方をするに決まつて。だから――」

殺氣とは無縁な瞳でバジルを見た。

「……だから、ここであんたに殺されても同じことだと思う。勘違いしたガキが、一人死ぬだけの

こと。ほら、本気なら今が絶好のチャンスだぞ。俺は一切抵抗しない」

「め、冥界で後悔するがいいつ」

そうだ、貴様は誤っているつ、とバジルは奥歯を噛む。

わしがどれだけクレア様を大事に思い、後から現れた貴様に憎悪を燃やしているか……それが少
しもわかつていないつ。

そんなこともわからぬからこそ、まだまだこいつはガキなのだつ。

……そう思い定め、思い切つて長剣を振り抜こうとするが……なぜか手にした長剣が千キロもの

重さを得たように、腕が震えた。

すぐ眼下にある白い首筋に叩き付ければ終わりなのに、どうしてもそれができない。

見つめるレインの黒い瞳に、ガタガタ震える自分の巨体が映っていた。なのに……レイン本人は平然と座したままなのだ。

あの名も知らない傭兵が言うように、やはりこいつは希有な男かもしれない。そこはバジルも認める他はなかった。

しばらくバジルを眺めた後、レインはこの廃屋に入つた頃より、よほど優しい声で呟いた。

「見られているとやりにくいか？ なら、目を閉じよう」

言下に、本当に目を瞑ってしまった。

それきり、ふつりと黙り込み、彫像のように動かない。

本人が言う通り、どれだけ甘ちやんなのかと思うが……不思議なことに、バジルはこれだけお膳立てしてもらつても、やはり長剣を振り切ることができなかつた。

いや、それどころか首を刎ねようと己を叱咤すればするほど、どうあつても斬りたくなくなってきた。

そもそも……バジルの本性を知り、それでいてなお弱虫扱いしなかつたヤツが、これまでどれだけいた。

けいだらうか。

皆、嘲るか恐れるかの二つに一つだつたと言つてよい。

クレアだけはどちらでもなかつたが、しかしバジルにとつてのあの方は主人でしかなく、向こうももちろん、仲間か配下としか見てはいないうだろ。

しかし、まだ会つて間もないレインは、バジルを優しい男だと評してくれたのである。

額先から床に汗を滴らせつつ、バジルはどうとう息を吐いた。

確かに……こいつは他のヤツとは違う、全然違う……そして、わしは丸一日ここに立つていようと、最後までレインを斬ることはできないだろう。

なぜなら、この少年はこの世界で唯一、自分を理解してくれた相手だからだ。

気付けば、バジルは長剣を鞘に戻し、ふらふらと部屋を出ようとしていた。

レインが立ち上がるうとする気配がしたので、断固として言い渡した。

「……わしは組織を抜け。斬れないなら、もうあそこにはいられない」

「なぜだつ。俺は——」

「黙れ、レイン」

バジルは振り返らないまま、声を励ます。

「少しでも情けがあるなら、わしのことは追うな」

「……あんたがそう言うなら。だが、いつでも戻つてこられるようにしておくれ」

「いや、もう戻ることはない……ないと思う」
バジルはそのままドアを開け、廊下に出た。
そのまま、後ろ手にそつとドアを閉じる。

「クレア様のことは頼んだぞ」

囁き声だったが、多分、あいつには届いたはずだ。

廃屋を出て、元の大通りへ戻った時、バジルはいつしか頬を涙で濡らしていた。

我ながら女めしいことだとは思ったが、どうしても止められないのである。

見るからに強面の大男が泣きながらんずん歩くせいか、見つけた通行人達が慌てて飛び退く始末だった。

……そんな風に気が散っていたからだろう。

いつしか彼を黒いローブの男が尾行し始めていたのだが、バジルは全く気付いてなかつた。



大騒ぎしてシールドの解除はなつたものの、結局は探すまでもなく、レインはしばらくして戻つて來た。

当然ながら、タルマはレインを引きずるようにして、居間として使つていての大部屋まで連れて行つた。やはり気になるのか、恰好のよいレスターが後に続き……なんと、戻つたばかりである、宗主のクレアまでもが後から部屋に入つて來た。

怒り狂つたバジルを引き連れ、レインが屋敷を出て行つた話は、戻つたクレアにもすぐに伝わつてゐる。お陰で、さすがに心配になつたらしい。

なぜか帰りはバジルを連れず、レインが一人で戻つて來たので、なおさらだろう。

部屋のドアを閉め、鍵までかけた後、タルマはレインの正面に座る。クレアとレスターはそれぞれタルマの左右に座り、そう大きくもない丸テーブルで、皆が不景気な顔を見合わせることになつた。

「なんの審問だよ、これは」

実際、憮然としたレインがそう述べた。

「いえ、審問のつもりではなく、ただ心配で——」

などと言いかけたクレアを遮り、タルマはテーブルを軽く叩く。

「レインを甘やかさないつ。もちろん、これは審問よ。バジルはどうしたのさ、レイン？」
ぎらつと睨んでやると、レインは生意気な仕草で肩をくめた。

「出て行つた……もうここにはいられないそうだ」

「えーーーっ」

真っ先に、仲が良かつたレスターが叫び、クレアが口元に手をやり、タルマは思いつき顔をしかめた。

「なんでえ？ 理由は聞いてるんでしようね」

「いいや、聞いてない」

堂々と吐かすレイン小僧こぞうである。

「何か心境の変化があつたのだろう。しばらく組織から離れたいようだ」

……ただ、こいつにしてはどこか後悔するような口ぶりであり、なんらかの事情があるのは間違いないらしい。

そもそも、バジルがクレアにほのかな思いを寄せていたことは、近しい者にはほぼバレていたわけで、しかもある大男が新参のレインを恋仇こいがたきのように見ていたことも、少なくともタルマとレスターには明らかだつたはずだ。

そこで当然ながら、タルマはレインをしんねりと見やり、ズバリ尋ねた。

「あんた、あいつを叩きのめしちゃつたんじゃないの？」でもつて、悄然としたバジルが、泣きながら出て行つちやつたとか」

レインは眉をひそめたが、はつきりと首を振つた。

「言つたはずだぞ、あいつと戦いになどならないと。事実、俺は街の片隅であいつと話しただけで、

剣も抜いてない」

全員、顔を見合させたが……タルマが見るところ、この返事に關しては、レインを疑う者はいなかつたようと思う。

例えは、争いに及んでバジルを叩きのめし、最後に命を奪つたのだとすれば、レインは必ずそう述べただろう。余計な言い訳などするまい。

それは、レインに厳しいタルマでさえ、認める他はなかつた。

こいつはその手の嘘はつかないヤツだと思う。ある意味、不器用過ぎるほど不器用なので。

ただし、タルマが「でも、事情は深そうだわね？」とぼそつと告げると、レインはあからさまに渋面じゅあんでそっぽを向いた。

やはり、なにか複雑な事情があるようだ。どうせ恋愛絡みだらうが。

「まあでも……出て行つたものはしようがないか」

考えた末にタルマが言うと、クレアとレスターがさつとこちらを見た。

「姉さん、そんな簡単に！」

「いやつ、ちょっと探す努力くらいはしましようよつ」

憤慨ふんがいしたような二人のうち、タルマはレスターをじっくり眺めた。

「あんただつて、なんでバジルが怒り狂つてたかは知つてるでしょう。本人がここにいたくないつて言うなら、あいつにとつてもその方がいいと思わない？」

「う……そう言われると……まあ……そうですけど」

ただでさえふくよかな頬を膨らませ、不承不承、インチキ神官服のレスターは頷く。

「でもほら、やつぱり友達としては、探して一言くらいは言いたいかなあみたいな——」

「じゃあ、ボヤいてないでそうしなよ」

タルマはあっさりと前言を翻した。

「本人の口から聞くのが一番だろしね。ほら、今ならまだ追いつくかもよ」

言われて、レスターは背中を押されたように立ち上がった。

すかさずレインが「メインストリートを東の外れの方へ行つたと思う」と述べたので、「ひ、人を集めて探しに来るよ」と返し、ドタドタと部屋を出て行く。

そのまま廊下を走つていく騒々しい音が、少しずつ遠ざかつていった。

「やれやれ……ホントに追いついて、また一騒動起きないといいけど」

他人事のようにタルマが呟くと、クレアが不審そうな表情で訊いた。

「あの、なぜか私以外はみんなバジルさんが消えた事情を知つてゐる雰囲気に思えるのですけど、どういうことですか」

「あなたが気にすることじやない」

レインがいつになく素早く言う。

「これはあくまでも本人の問題なんだ。とにかく、しばらく組織を離れたいそuddだから、^{きゆうか}休暇をやつたと思えばいいんじやないか？」

「休暇……ですか」

考え込むようなクレアを、タルマは横目で呆れて見やる。

いつもながら、この子もたいがい鈍いし！ と思うものの、レイン同様、ずばつと教えてやろうとは思わなかつた。聞いたところで、クレアとてどうしようもないだろうから。だいたい、クレアはバジルが出て行つたと聞いて心配しつつも、ショックまでは受けていない。

あくまで仲間を思うが故であり、それ以上のものではないのだ。

だとすれば、真相を教えて何になるのか。

それに、レインが言わなくらいだから、バジル本人もクレアに教えてほしくないのだろう……きつと。

タルマはそう判断し、余計なことは一切言わないとした。

結論として、バジルの出奔は確定的となつた。

夜遅くに戻つて来たレスターとの配下達が、「手分けして王都中を探したけど、見つからなかつた」と肩を落としたからだ。

おそらくバジルも、レスターなどが追つてくるのは予想していて、とつと王都を脱出したのだ
ろうと思われる。

この報告を聞き、クレアは屋敷で待機中のメンバーを集め「バジルさんはしばらく組織を離れた
いそうです」と宣言し、この件は一応の終結を見た。

ただし、最後にバジルと会つたレインはもちろん、親しかったレスターも完全に納得はしていない
ようなので、組織としても、活動の合間に彼の行方を探すことになるだろう。

ただ、なんとなくタルマ自身は、もうバジルとは一度と会わないような気がしている。
あいにく、後になつてからそれが甘い見通しだったと知れるのだが……少なくとも今は、（タル
マ的には）他にもっと大事なことが控えていたのも事実だ。

というのも、主城攻略の無謀な計画が、いきなり動き始めたのである。

騒ぎからさらに三日を経て、レインはまた同じメンバーを居間に集め、ぼそつと言つた。

「そろそろ、マイエンブルク城を落とそうと思う」

攻城戦の話というよりは、「そろそろ猫を飼おうかと思う」みたいな清々しいまでに緊張感のな
い口調に、呼ばれたタルマ達は呆れた。
クレアでさえ、まじまじと目を見開いたほどだ。

それらの一切を超然と無視して、レインは一人で腕組みなどした。

「ただし、調べるうちに気になるところが出てきた。バルダー王とマイエンブルク城については、
ひどく不自然な部分がある」

「あたしに言わせりや、あなたの計画 자체が思いつきり不自然に思えるわね！」

タルマはすかさず口を挟んだ。

「しかも、まだ一言も計画の内容を聞いてないし」

レインはさらりとタルマを無視した。

「調べる限り、バルダー王の即位から三年の間に、二度ほど有力騎士達の反乱が起こつてゐる。計画
は外から見る限りかなり成功率が高そうに思えたのに、なぜか二度とも首謀者は死んでいる」

レインは渋面のタルマを含め、三人をぐるりと見渡した。

「特に去年起つた反乱騒ぎでは、バルダーが信頼する騎士隊長が、主君が一人になる絶好のチャ
ンスを見計らつて斬りかかつたらしい。しかし結果的に彼は返り討ちに遭い、首を刎ねられた」

「バルダー王つて、威張り散らして居る癖に弱っちいヤツだと聞いたけどなあ」

「レスターが首を傾げると、クレアも不審そうに問うた。

「王は、巷間の噂より腕が立つということですか？」

レインはきつぱりと首を振つた。

「いや、どうも街中で囁かれる噂の方が正しいらしい。二年前、珍しくバルダーが城外に出て、王

都を脱出したのだからさうだ。

（すがすが）

立ち読みサンプル はここまで

第一章 生死を預ける

都ファンティーヌを視察したことがある。その時、機会を窺つていた住民達が決起して、十名ばかりで王の行列を襲つたんだ。当時の彼は、剣を抜く以前に、腰を抜かして這つて逃げたようだ」「……めちゃくちや暗殺しやすそうだよね」

レスターが呆れて笑つた。

「じーさんが生きてたら、その時点で一発で片を付けたかもなあ」

亡くなつた老魔法使いを思い出したのか、どこか寂しそうに言う。

「ところが、その時に襲撃した十名は、全員その場で息絶えている」

レインは、いきなり冷水を浴びせるようなことを言つてくれた。

「しかも、どうやつて彼らが倒されたのか、はつきり見ていた者が誰一人として見つからない。當時の目撃者も探し当たるが、そいつの話だと『襲撃者は全員、図つたように同時に倒れた』と言つてたな」

静まり返つたテーブル上をまた見渡し、レインは低い声で続けた。

「考えてみれば、心ある臣下の騎士達が軒並み離散し、現在はご機嫌取りだけが能の取り巻きしか、ヤツの周囲には残っていない。城に籠もりきりとはいえ、ある意味で隙だらけなのに、どういうわけか誰もヤツを打倒できないようだ。ヤツには、明らかに謎がある」

寒気がするような内容の割に、レインは特に気負う様子もない。

「外から調べただけでは、バルダーの不可解な部分を解明するのは困難なようだ。問題の謎を知る

ためには、結局は計画を実行し、ヤツと向き合うしかあるまい」

——故に、俺は攻略作戦を決行することにした。

などと、このレイン小僧は悪びれずに吐かすのである。

「あ、あんたね……」

落ち着いた態度で、途方もなく大馬鹿な発言をするレインに、タルマは思わず頭を抱えた。

こいつに組織の命運を賭けようというのだから、クレアはよい根性をしていると思う。

可能ならレインの噂も聞こえないほど遠くへ逃げたいくらいだが、あいにくタルマの立場としてはそもそもいかないのだつた。